

〔研究ノート〕

リスボン再建と「リスボア・ポンバリーナ」について

About the reconstruction of Lisbon and the 'Lisboa Pombalina'

疇 谷 憲 洋

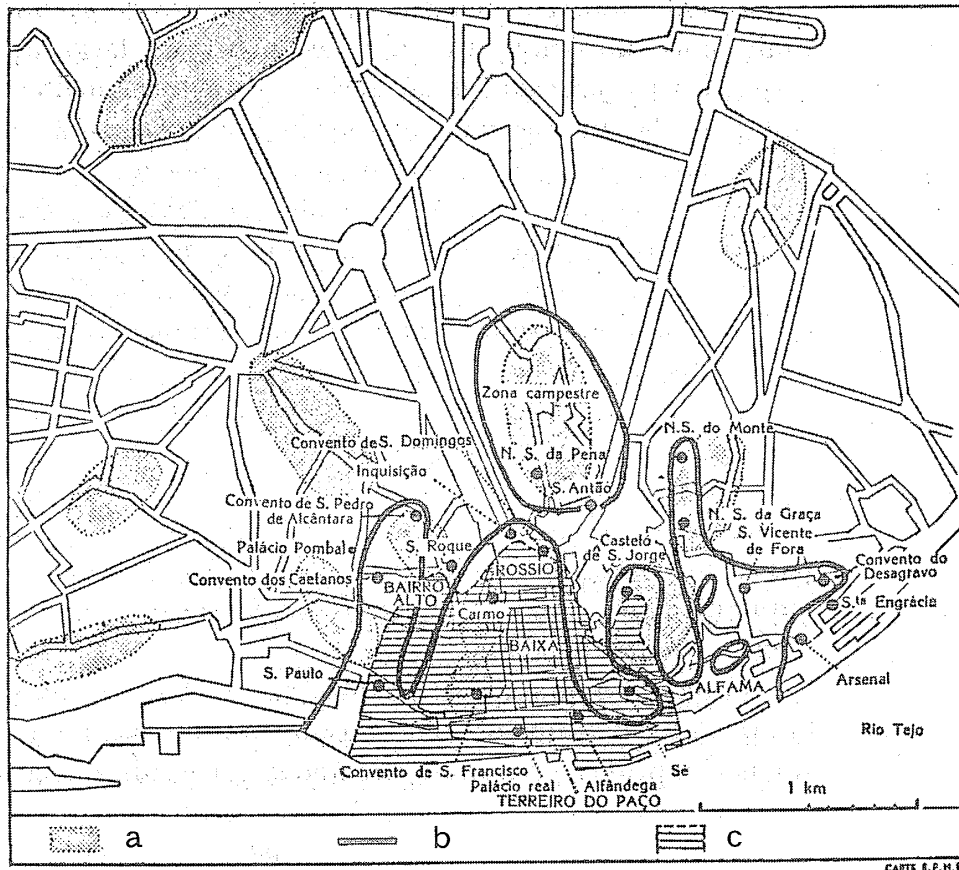
Kurotani Norihiro

はじめに

「最初の衝撃は、午前9時45分ごろ始まり、私に判断できる限りでは、6、7分続き、そうして、15分ぐらいで、この偉大な都市は廃墟と化したのです。それからただちに火の手が上がリ、5、6日もの間、焼き尽くしました。この地震の力の源は、この都市の真下にあったように思われます。…税関や王宮が立ち並ぶ波止場にもその力を放出したと思われます。すべてが運び去られ、すっかり姿を消してしまいました。地震の時には、川の水は20から30フィート上昇していました。」

イギリス領事エドワード・ヘイは、当時の状況をこのように語る⁽¹⁾。1755年11月1日、キリスト教徒にとっては万聖節にあたり、多くの信徒が教会に詰め掛けていたこの日、ポルトガル沖合いの大西洋海底を震源に起こった地震は、ポルトガル各地に甚大な被害をもたらした⁽²⁾。とりわけ、首都リスボンには、震度七規模とされる揺れが襲い、津波がおしよせ、さらに発生した火災により、市内中心部は瓦礫の山と化した。人口密集地であり川沿いの都市であったことから、王宮やオペラハウス、教会など、リスボンの中心部の家屋で倒壊・消失したものは三分の二以上、犠牲者に至っては一万名以上とされるが正確な数は分からず、大航海時代以来世界各地をつないでいた国際都市の惨状はさまざまな形で伝えられ、当時オプティミスティックな思潮が支配的であったヨーロッパ諸国に衝撃をもたらした。

テージョ川に面し、フェリペ王朝期の巨大な塔が目立つ王宮パソ・ダ・リベイラも、この時倒壊・焼失するが、国王ジョゼ一世を始めとする宮廷は郊外のベレン地区にいて難を逃れる。「死者を埋葬し、生存者の世話をする (enterrar os mortos e cuidar dos vivos)」という、後世に語継がれることになるモットーの下、ポルトガル政府は、外務・陸軍担当大臣セバステイアン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・イ・メロ、後のポンバル侯爵を中心に、治安維持や価格統制など事態の平穏化に乗り出す一方で、地震によって破壊された首都の再建に着手する。再建されたリスボンは、それまでのトポロジーを概ね踏襲しながらも、格子状の街路と方形の広場によって構成された中心部をもつ近代的な都市へと変貌し、復興・再建事業を指揮したポンバルの名を冠して「リスボア・ポンバリーナ (ポンバル風リスボン)」とさえ称されるようになる。本稿では、リスボン再建事業の歴史的意義について論じた『リスボア・ポンバリーナと啓蒙主義』の著者 José-Augusto França の諸論考と、再建事業の要となったバイシャ地区について、



図① リスボン大震災において、震度7規模の揺れの範囲と火災が襲った範囲
(a: 丘陵、b: 震度7規模の範囲、c: 火災の及んだ範囲)

文化遺産としての意義を強調しその保護を訴える、Maria Helena Ribeiro dos Santos の『バイシャ・ポンバリーナ、過去と未来』を中心に、リスボン再建事業の意義について考察する。

1 震災以前のリスボン⁽³⁾

(1) 都市リスボンの発展

リスボンは、テージョ川河口に位置し、地中海から進出してきたフェニキア人、ギリシア人がここに植民し、ローマ時代には、属州ルシタニアの重要拠点となる。しかし、現在目に見える都市の核が形成されたのはイスラーム期であった。711年のイベリア半島進出から数年にして、後にポルトガルとなる半島南西部はイスラーム勢力の支配下におかれるが、トレード、コルドバといった政治的中心からは距離を置いていたため、地方勢力の半自律的支配が残存することになる。リスボンは、アル・ウシュブナーという名前とともに、現在のサン・ジョルジェ城を中心としたイスラーム都市として発展する。12世紀に、ドーロ川・ミーニョ川間を中核とするポルトガル王国が成立すると、1147年には初代国王アフォンソ・エンリケスによって征服され、レコンキスタ終結後の1255年には、王国の中心がここに移る。13~14世紀におけるヨーロッパの商業的發展の下で、地中海と北海・バルト海の交易圏をつなぐ港湾都市として重

要な位置を占め、ジェノヴァ、ヴェネツィアなどからイタリア商人も多数到来し、国際的な貿易港として経済的に発展する。それにとともなう人口増加により、イスラーム時代の城壁を越えて都市は拡大する。

大航海時代、アジアとの交易を王室管轄の独占事業とし、リスボンにおいて管理したことから、サン・ジョルジェ城にあった王宮がマヌエル一世期にはテージョ河畔へ移動し、インド商務院、税関などの関連機関が王宮を中心に設置される。こうしてリスボンは、ポルトガルの政治・経済の中心として発展し、人口も、15世紀初頭の6万人から、17世紀中ごろには15万人、18世紀中ごろには25万人と、増加の一途をたどり、ポルトガルの総人口の10パーセントを占める大都市に成長する。

(2) 震災以前の都市空間

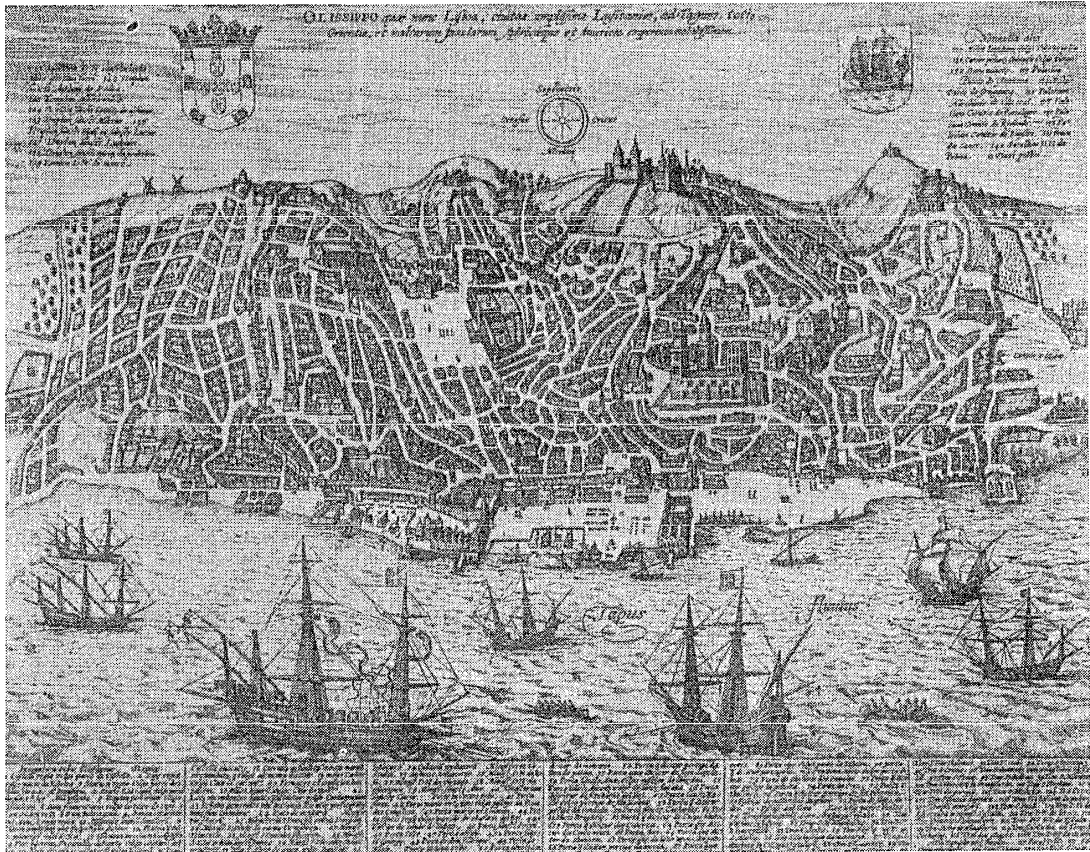
震災以前のリスボンは、どのような都市空間を形成していたのか。図②は、16世紀のリスボンの都市景観を描いた図であり、図③は、17世紀の街路と区画を平面的に描いたもの、そして、図④は、1755年までの都市の発展を表すものである。以下、図を参照しながら、震災以前の都市空間を概観する。

まず、西側の丘陵にサン・ジョルジェ城 (Castelo de S. Jorge) が位置し、そこからテージョ川に向かってイスラーム期の都市が伸びている。レコンキスタの終結によってリスボンがポルトガルの中心になるとともに人口は増加、街は市壁を越えて東西に拡大する。1375年、フェルナンド一世期に新たな市壁が建設されるが、その後もリスボンは、大航海時代の繁栄とともに、さらに拡大を続ける。

18世紀前半には、ロシオ (Rossio, 「広場」) とテレイロ・ド・パソ (Terreiro do Paço, 「王宮前広場」) という二つの広場が都市リスボンの焦点になっている。ロシオは、市場が開かれ露店が連なり、市民の日常生活が展開される場所となっている。一方、マヌエル一世期に王宮が建設されたことにその名が由来するテレイロ・ド・パソは、インド商務院を始めとする政府関係機関が隣接し、多数の船舶が出入りするテージョ川河口に向かっていて、そのため、「公権力」的な性格が強く、市民の広場であるロシオとは対照をなしている。そして、この二つの広場に挟まれた地域が、バイシャ (Baixa, 「下町」) である。商工業者を中心とした民衆階層が集住し、曲がりくねった狭い街路が特徴的である。

さらに、このバイシャから市壁を越えて西側に、貴族や裕福なブルジョアの邸宅が建設される。いわゆるバイロ・アルト (Bairro Alto, 「高い地区」) であり、直線的な街路や区画が特徴的である。さらに西へ目を向けると、大航海時代を象徴するジェロニモス修道院やベレンの塔を擁するベレン地区がいわば副都心として発展している。

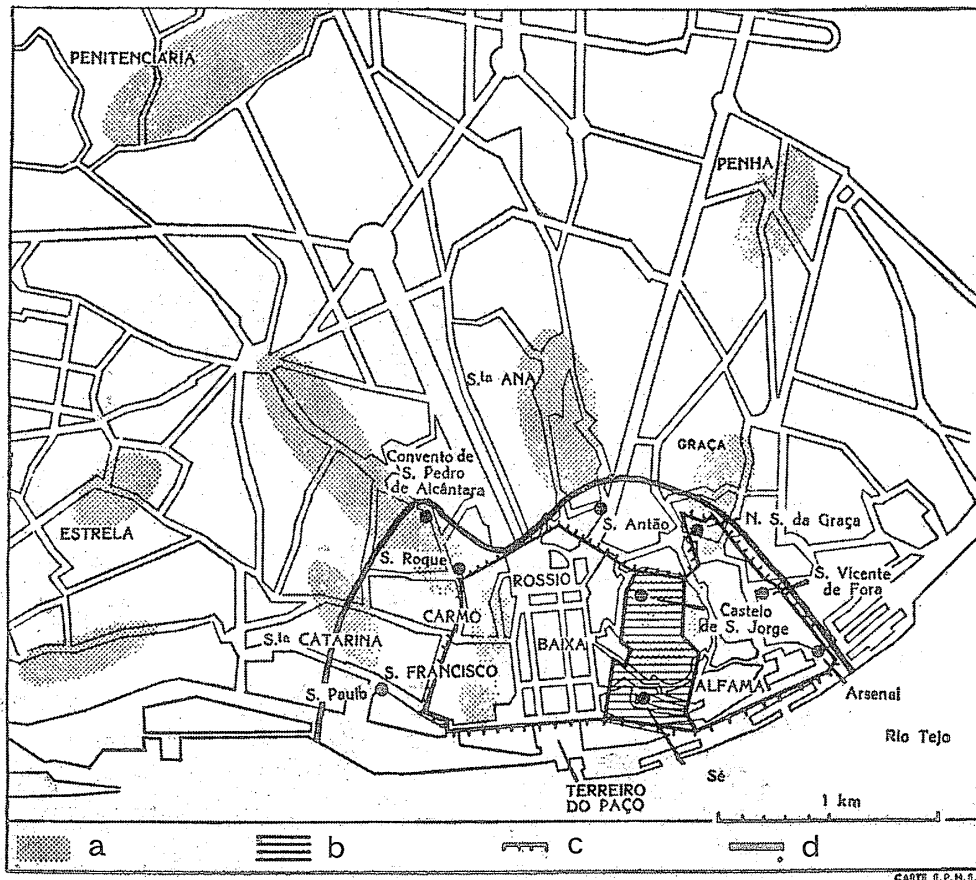
このように、リスボンは、人口が増加し市域が拡大する一方で、一部を除いては目ぼしい公共建築や本格的な都市計画は行われず、「増殖するが発展しない都市」であった。水道橋アグアス・リーブレスやマフラ修道院宮殿など、ジョアン5世期における一種の建築ブームも、リスボンの都市構造に根本的な変革をもたらすものではなかった。1755年の大震災による市中心部の建造物の倒壊・消失は、新しい都市計画を実行する機会になる。



図② 16世紀終りごろのリスボンを描いた版画。中央部上、最も高い所にあるのが、サン・ジョルジェ城



図③ 1650年ごろのリスボンの平面図
(a : ロシオ、b : テレイロ・ド・パソ、c : バイシャ、d : パイロ・アルト)



図④ 1755年までのリスボンの発展
 (a:丘陵、b:イスラーム期の都市、c:フェル
 ナンド一世期の市壁、d:1755年の都市の範囲)

2 リスボン再建プランの作成

(1) マヌエル・ダ・マイアの再建築

事態の收拾と平行して、ポンバルは、陸軍の工学技官としてトップの地位にあったマヌエル・ダ・マイアを中心とする建築技師グループに、再建プランの作成を行わせる。マイアは、1755年12月4日の報告書を皮切りに、三部からなる再建築を提出した⁽⁴⁾。

第一部においては、

- ① 震災以前の建物の高さ・道幅で再建
- ② 建物の高さはそのまま、道幅を拡張
- ③ 建物は三階建てに制限、道幅も拡張
- ④ バイシャ地区を取り壊し、瓦礫を利用して高みへの傾斜をなだらかに整地し、かつ海への下り傾斜をつけて水が流れるようにし、その上で新しい街路を自由かつ適切に作り、幅を広げるだけでなく、建物の高さも道幅を超えないようにする。
- ⑤ 破壊されたリスボンは放棄し、ベレン地区辺りに新しい都市を建設といった五つの再建築を提示している。その上で、

案①は、旧建物・土地所有者に不満は起きないものの、道が狭く入り組み通行には不便で、かつ震災に弱く、

案②は、建物の高さがそのままのため、震災に弱く、

案③は、震災対策には優れているものの、瓦礫の処理の困難さを伴い、かつ道を広げ建物の高さを制限したため、旧土地・建物の所有者の不満を招き、

案④は、地震対策や瓦礫の有効活用という点では優れているものの、やはり旧土地・建物の所有者の不満を招き、

案⑤は、最も容易な方法ではあるが、リスボンの主要な通りに建物を所有していたものの不満を招く、

として、それぞれの利点と問題点を指摘しながら、新しく王宮が建設される候補地を考え合わせた上で、案④を推薦している。さらに、通行の便や都市の治安を勘案し、トレイロ・ド・パソから市内の中心部へ二つの通りを開通させることも提案している。このように、第一部では、地震の被害を受けにくく通行や排水の機能に優れた都市建設の必要性を訴える一方、新しい区画で都市を再建することに伴う旧土地・建物所有者の権利問題が再建事業の障害になることを指摘している。そしてこれが、以後の再建案の基調となる。

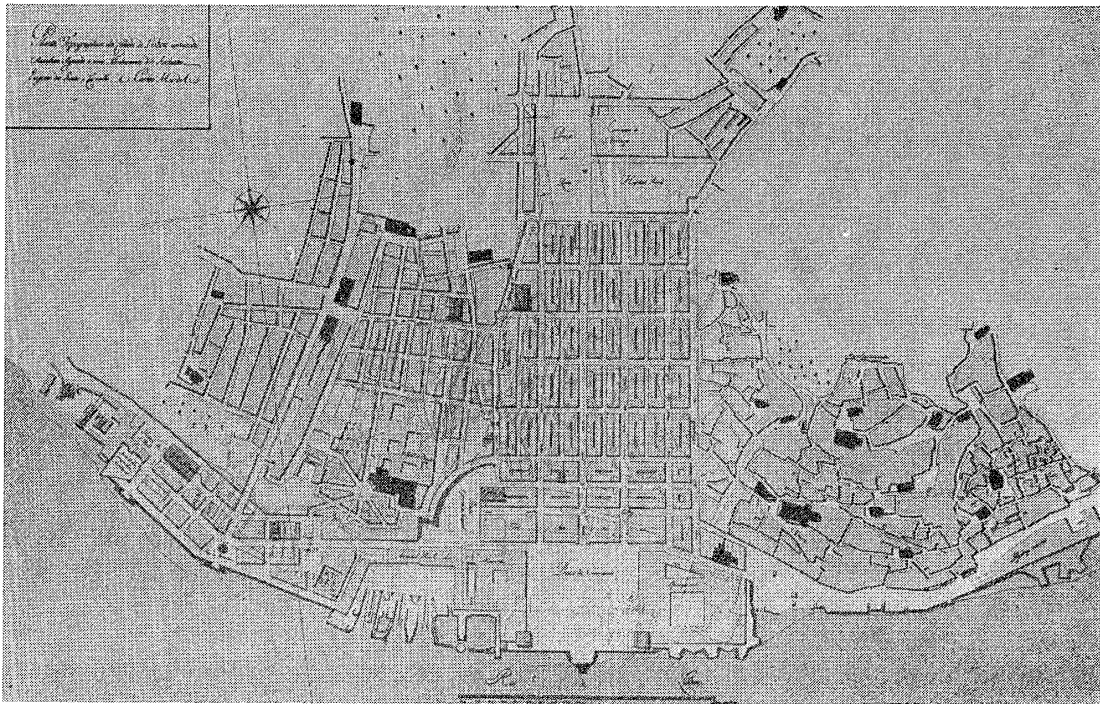
1756年2月16日付けの第二部においては、第一部で示した再建案のうち案④の実行を推奨しながら、旧土地・建物の所有者に対しては「海に近かったものにはより海に近い場所、ロシオに近かったものにはよりロシオに近いもの」とその代替地の付与についての配慮も忘れていない。特筆すべきは、「それぞれの街路が門、窓、そして高さにおいて同様なシンメトリーを維持するため」その図面についてリスボン市会の建築技師エウジェニオ・ドス・サントスと相談をしていることが記されている。

1756年3月31日付けの第三部では、都市における污水・汚物の処理や、バイシャへの水の供給の問題、ロンドンにならってメインストリートを車道と歩道に分けることなど、都市生活の利便性の向上についてさらに細かく考察を加えている。さらに、建築技師グループの作成した新しいリスボンの再建プランの図面や、エウジェニオ・ドス・サントスによって作成された三階建ての建物のファサードの図面が同時に提出され、リスボン再建が具体的な図面の形で視覚化されることになる。

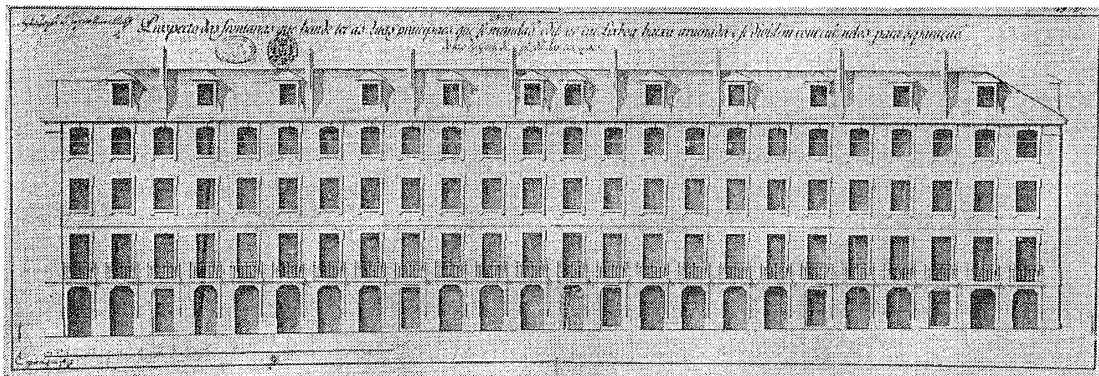
(2) リスボン再建プラン

六つのプランのうち、前半の三つの案は震災以前のリスボンの形態を尊重しながら街路を広げ、直線的にしたものであり、後半の三つは、震災前の小教区教会の位置に配慮することなく、バイシャ地区を格子状の街路で区画したものである。結局、エウジェニオ・ドス・サントスの作成した五番目のプランが採用されることになる(図⑤)。

サントスのプランは、トレイロ・ド・パソをほぼ正方形に、ロシオを長方形に区画し、この二つの広場をメインストリートで連絡し、縦横に直角に交わる街路を配置した。そしてこの街路は、主要な通りが幅60パルモ(中心の40パルモは車・騎馬用、両側の10パルモは歩行者用。なお、1パルモはおおよそ22cm)、副次的な通りは40パルモに規定され、震災前のバイシャ地区の狭く通行に不便な街路という問題を解消している。



図⑤ エウジェニオ・ドス・サントスのリスボン再建案（第5プラン）



図⑥ 主要な街路に面した建物の前面（屋根に類焼を防ぐ壁が突き出ている）

さらに、建物についても、サントスは、図⑥のようなファサードを持つ建物をデザインしている（当初はマイアの再建プランに則って三階建ての建物をデザインしたのだが、再建時の権利問題を勘案した結果、五階建てでデザインされることになる）。さらにこの建物は、内部に、「ガイオーラ（鳥かご）」と呼ばれる木の骨組みを組み込んで耐震性を高め、屋根には類焼を防ぐ目的の壁が張り出している。外面は窓枠に至るまで規格化され、実際に再建事業を行う際には、部品を大量生産して迅速に再建が行えるよう配慮している。

こうして、マイアの献策書と、それに基づいたサントスのプランによって、基本的な構造は踏襲しながらも、震災前とは装いを新たにしたりスボンの再建案が作成された。震災前のバイシャの特徴であった入り組んで狭い街路は一掃され、方形に区画されたロシオとテレイロ・ド・パソを、二つのメインストリートが連絡し、そのメインストリートを軸にして、バイシャ

は格子状の街路で構成されることになった。

さらに、バイシャを中心とする再建案に並行して、震災以前のリスボンにはなかった空間も構想される。そのうちの 하나가、パッセイオ・プブリコ (Passeio Público) がある⁽⁵⁾。1764年に構想され、ロシオのさらに北側に建設されたパッセイオ・プブリコは、周囲に壁を巡らした遊歩庭園であり、リスボン史上初の「公園」が形成されることになる。

おわりに

再建案に則った再建事業が具体的に開始されるのは1758年になってからであった⁽⁶⁾。1758年5月12日に出された勅令においては、バイシャ地区を中心とする再建地域における旧土地・建物所有者にたいし、

再建を希望するものは、権利を確定してから五年以内に企画に沿って再建すること。

再建を希望しないものは、再建を希望する他のものに一定の条件でその権利を譲渡すること。

再建希望者に対しては、資金の借り入れなどにおいて優遇措置が取られること。

などが規定され、同年6月12日に出された布告においては、ロシオからトレイロ・ド・パソの間の地区における再建について、具体的な地名とともに細かく指示が出される。1759年からは地所の割り当てが行われ、本格的な再建事業が開始される。再建されたバイシャ地区は、部分的な改築を経ながらも、今日までその姿をとどめ、再建事業を指揮したポンバルの名を冠して「バイシャ・ポンバリーナ」と称されている (図⑦)。

こうして再建されたリスボンについて、José-Augsto Françaは、その意義として、

① 再建されたリスボンのなかに、王宮が建設されなかったこと

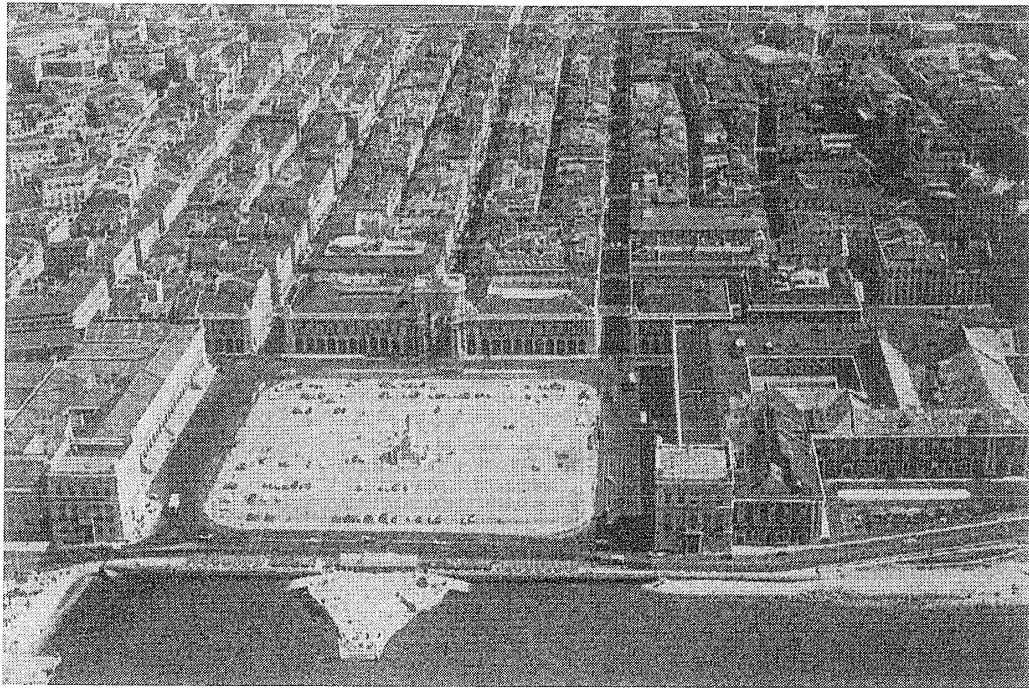
② テレイロ・ド・パソが、プラサ・ド・コメルシオ (Praça do Comércio, 商業広場) に名称を変更

③ パッセイオ・プブリコの設置

の三点を指摘している⁽⁷⁾。結局、王宮はリスボンから少し離れたアジュダに建設され、さらに郊外のケルス宮とあいまって、宮廷生活は首都の中心部から離れた所で営まれることになる。その一方で、税関などの商業関係施設が建設され、また再建事業に協力したリスボン商業会の功績を称える意味もあって、「王宮前広場」から「商業広場」へと名前が変わったトレイロ・ド・パソには、国王ジョゼ一世の騎馬像が設置され、国王の権威を誇示しながらも、王権と商業ブルジョワの結び付きを象徴的にしめしている。パッセイオ・プブリコは、都市民層に余暇を過ごす場所を提供し、19世紀のブルジョワの時代を予期させるものであった。このように、Françaは、リスボン再建事業と、商業ブルジョワを保護し重商主義政策を推進したポンバルの政策との連動性を重視し、時代の変革に即した再建事業の意義を主張している。

2005年は、リスボン大震災250周年に当たり、前年に東南アジアを襲った震災・津波の経験・記憶ともあいまって、1755年の地震は、雑誌やWeb上で取り上げられ、ポルトガル人に対して防災意識を喚起するとともに、新たな研究書や論集も出版され、この250年前の未曾有の震災について新たに考える契機となった。しかし、本稿では、こうした新たな成果を汲むことはできなかった。ポルトガルの社会・文化の変容や、ヨーロッパの思想、文学に与えた影響など、リスボン大地震がもつ様々な意味についての考察は、別稿に譲ることにしたい。

(大分県立芸術文化短期大学助教授)



図⑦ 20世紀のリスボン、テージョ川からプラサ・ド・コメルシオ、バイシャ

【註】

- (1) Maxwell, Kenneth, *Pombal, Paladox of the Enlihtenment*, Cambridge Univ. Press, 1995, pp.21-23.
- (2) リスボン大震災の被害状況については、被害者数など諸説あるものの、França, José-Augusto, *Lisboa Pombalina e o Iluminismo*, Lisboa, Livraria Bertrand, 1983, pp.59-76.を参照
- (3) Ibid, pp.17-58.
- (4) マイアの再建案については、Ibid, pp.311-326.
- (5) Ferreira, Jorge Rodrigues, 'Passeio Público (1764-1889)' in *Dicionário da História de Lisboa*, Lisboa, 1994, pp.692-695. なお、このパッセイオ・プブリコのあった地区は、19世紀後半のリスボンの発展とともに、アヴェニダ・デ・リベルダーデ（「自由大通り」）へと変貌、現在のリスボンのメインストリートを形成している。
- (6) 1758年の勅令と布告については、França, José-Augusto, *Op.cit.*, pp.327-337.また、再建の進展については、Santos, Maria Helena Ribeiro dos, *A Baixa Pombalina, Passado e Futuro*, Lisboa, Livros Horizonte, 2005, pp.79-81.
- (7) França, José-Augusto, *A Reconstrução de Lisboa e a Arquitectura Pombalina*, Lisboa, Biblioteca Breve, 1989, pp.91-97. 及び、Idem, 'Lisboa Pombalina e Estética do Iluminismo', in *Lisboa Iluminista e o Seu Tempo*, Universidade Autónoma de Lisboa, pp.11-22.

[図版出典]

- 図① França, José-Augusto, *Lisboa Pombalina e o Iluminismo*, Lisboa, Livraria Bertrand, 1983, p.63.
- 図② Ibid, p.20.
- 図③ Ibid, p.26.
- 図④ Ibid, p.19.
- 図⑤ Ibid, p.105.
- 図⑥ Ibid, p.109.
- 図⑦ Maxwell, Kenneth, Op.cit., p.33.